

46

荻野吟子晩年の開業地事情

誌上発表

小島 光洋

墨田区図書館運営協議会／弘前大学医学研究科社会医学講座

荻野吟子は明治41(1908)年に北海道から東京へ引き揚げ、大正2(1913)年に没するまで、東京市本所区に居住し開業していた。しかし、その時期の行跡に関しての情報は乏しく、「日本女医史」(1962年)や島本久恵の「女医事始」(1966年)には隠棲・落魄したような記述がある一方、親戚筋に当たる常見育男が、吟子の養女トミなどから聞いたところでは、人の出入りも多く賑やかな生活であったという(1967年)。前2者は開業地を小梅町とし、常見は「始め新小梅町であったが、後に小梅町に変わった。」とする。二つの町は別の地区である。

明治42年12月の帝国医鑑には、志方ギン子(吟子)が本所区新小梅町1番地で開業と記載されている。大正元年本所区地籍地図(東京市区調査会)では、新小梅町4番地に荻野医院が記載されている。敷地面積は326坪である。同年の地籍台帳では、新小梅町全体の所有者は水戸徳川家第13代当主徳川圀順、現住所・本籍は新小梅町1番地とある。地籍地図における水戸徳川侯爵家邸は20番地に所在する。

荻野医院の北隣は新井医院、東隣は東洋産院、産院の北東隣に武田医院があり、さながら今日のメディカル・モールの様相を呈している。大正8年の帝国医師名簿に新小梅町2に新井賢吾の名が見える。帝国医鑑、帝国医師名簿では新小梅町に武田姓の医師はいないが、3名の武田姓の中に本所区横網町2-14に武田敬治の名が見える。同住所に安生堂産院、産婆学校、武田医院と類似した配置が見られることから、この医師が兼業開業している可能性があるが、裏付ける根拠は見出せない。

浅草から医院まで陸路では吾妻橋を渡るが、少し回り道になる。当時、隅田川には渡し舟があり、現在の東武鉄道の鉄橋の位置にあった枕橋の渡が最短距離である。枕橋から源森川(現在は北十間川)沿いに進むと、東武鉄道浅草駅(現在のとうきょうスカイツリー駅)に至る。荻野医院はその中間の源森橋北詰に位置し、浅草駅までおよそ300mである。

当時、東武鉄道は吟子の身内の多く住む加須、羽生、館林に直通していた(東京の鉄道発達史：今尾恵介、2016年)。浅草駅から東京市電が上野、神田、日本橋などへ通じ、医院から約200m南に停留所が置かれていた。本郷教会へも市電で行くことができ、吟子の生活にとって便利であったろう。当時の陸運や水運の状況から、人流・物流などの拠点・中継点として繁栄していた地と言える。

荻野医院から南に400mに本所警察署原庭分署(明治41年設置)が、800mに警視庁第六消防署松倉町分署(明治43年設置)が位置する。消防署は本所区で最初に設置され、現在の本所消防署の発祥となった(本所警察署および本所消防署HP)。他と比べて早い時期に安全・防災面の整備が行われた地域と考えてよい。大正2年1月に医院の西側で近火が発生したが消防の働きですぐに鎮火した旨を、田中かく子に葉書で書き送っている。東京に引き揚げ後の吟子の書簡の発信地は、すべて新小梅町である(熊谷市史資料編8近代・現代3, 2019年)。

吟子がこの地に落ち着いた経緯について、常見は姉の野口友子や近隣に住む甥姪など親戚筋の尽力を指摘する。水戸徳川家の一角を借地できた要因として、松本万年・荻江親子の開いた止敬塾以来の荒川(阿部)八重との深い親交を考慮する必要がある(荒川重平回想録)。八重の夫重平は旧幕臣で徳川慶喜に近い。吟子が荒川家に寄宿していた明治16年に生まれた荒川家の長女豊子は広辞苑編纂者の新村出の夫人となる。出の義姉信と慶喜との間に生まれた英子が徳川圀順夫人である。

吟子に関する「日本女医史」の記述の根拠について、内田和秀が問題点を指摘している(聖マリアンナ医科大学雑誌, 2017年)。同書および「女医事始」における晩年の記述には本質的な部分での修正が求められる。